

明治廿五年十二月二日 内閣書記官

内閣總理大臣

伊藤

内閣書記官長

外務大臣

小幡

大藏大臣

大藏

海軍大臣

海軍

文部大臣

文部

逓信大臣

逓信

内務大臣

大藏

陸軍大臣

陸軍

司法大臣

司法

農商務大臣

農務

明治三十六年度海軍臨時艦艇製造費概算及之ニ関聯

法律案

此ヲ法律案ノ形式ヲ具シテ更ニ閣  
議ハ提出相成スルヘシ

右閣議ニ供ス

官房  
第九九八号

曩ニ明治二十九年 度ヨリ同三十八年度  
ニ涉ル繼續事業トシテ海軍ノ擴張  
ヲ畫策ニ漸次竣成ヲ告ケントスル  
ニ際ニ茲ニ東洋ノ形勢ニ顧ミルト  
キハ将来ニ於ケル帝國ノ勢力ヲ維持  
スルカ爲メ更ニ一層ノ擴張ヲ爲スノ  
必要アリ依テ明治三十六年度以降十  
箇年ヲ期シ現在ノ勢力ニ對シ更ニ  
必要ノ艦艇ヲ増加シ及之ニ伴フ陸上

、設備ヲ完フセントス

右ノ經畫ヲ實行スル爲ニ要スル所ノ經費ノ總額ハ九千九百八拾六萬參百五圓貳錢壹厘ニシテ之ニ着手ヨリ四十六年度ヨリノ經常維持費及補充積立金千五百拾參萬九千參百貳拾七圓五拾六錢參厘ヲ加フルトキハ總計壹億千四百九拾九萬九千六百參拾貳圓五拾八錢四厘トナリ之ヲ十箇年間に均分スルトキハ一箇年ノ所要額約壹

千百五拾萬圓ニ達スルノ計算ニシテ到底現在ノ歲計中ニ於テ要辦ノ途ナキニヨリ孰レカ他ニ適當ノ財源ヲ求ムル必要アリ曩ニ明治二十九年年度ニ於テ經畫セシ海軍擴張費ノ財源ハ主トシテ清國償金及公債ニ依リシト雖モ今ヤ清國償金ハ使途夫々確定ニ餘ス所幾何モナキニヨリ之カ財源ニ充ツルニ足ラサルハ勿論公債ノ募集モ近時内外金融上ノ狀態ニヨリ其募集ノ目的ヲ

達スルコト困難ナルカ爲メ既定ノ公債事業  
費スラ尙ホ容易ニ之カ募集ヲ了スルヲ  
得スレテ屢ニ事業ノ繰延ヲ行ヒ以テ一時ノ  
融通ヲ計リシノミナラス三十五年度以降ハ  
臺灣事業公債ヲ除クノ外公債募集ヲ  
見合セ一般歳入ニヨリ支辨ノコトニ其  
經畫ヲ改メタリ且假ニ公債ヲ募集シ  
テ其財源ニ充ツルモノトスルモ内國經  
濟上ノ狀況ハ明治二十七八年事件以來  
官民事業ノ勃興ニ伴ヒ資金ヲ要スルコト

非常ニ多カリシカ爲メ金融逼迫ヲ告  
ケ来リシモノ今僅ニ回復ノ期ニ向ハン  
トシツ、アルニ過キテ到底巨額ノ公債  
募集ニ應スルノ餘地ナキハ明ナルニヨリ  
若シ之カ募集ヲ要スルモノトセハ勢外國  
市場ニ之ヲ求メサルヘカラス然ルニ現時  
外國市場ニ於ケル我公債ノ高ハ貳億  
圓餘ニ上リ之カ爲メ毎年支拂フ所ノ  
元利金ハ壹千萬圓以上ニ達スルノ計算  
ニシテ此金額ハ悉ク正貨ヲ以テセサルヘ

カラス此上外國債ヲ増加スルハ國家經濟上將來ノ為メ得策ニアラサルヘク況ヤ公債ノ募集ハ果シテ適當ノ條件ヲ以テ豫期、如ク其目的ヲ達スルヲ得ルヤ否ヤハ疑ナキ能ハス旁之ヲ以テ確固ナル財源トシテ海軍擴張ノ如キ切要ノ事業ヲ經畫セントスルカ如キハ財政上策ノ得タルモノニアラスト認ムルヨリ公債ヲ以テ財源ト為スノ途ハ之ヲ避ケタリ

公債ヲ以テ財源ト為スヲ不可ナリトセハ勢之ヲ租稅ノ増徴ニ待タサレハカラス今其増稅ノ餘地アルモノヲ尋ヌルニ所得稅ハ明治三十二年度ニ於テ其稅率ヲ増加シ從前ニ比シ倍數以上ノ收入ヲ得タルニヨリ近々西三年ニシテ復テ増稅ヲ為スカ如キハ最モ機宜ニ適セサルモノナリ營業稅ハ新設以來日尚ホ淺ク當初各地ニ生シタル紛擾僅ニ其跡ヲ歛メタル今日再々増稅ヲ為スカ如キコト

アラハ忽テ當業者ノ反抗ヲ招キ其結  
果ハ何等得ル所ナキニ至ラン砂糖消  
費税ハ實施後漸ク一年ヲ經過シタ  
ルニ過キス再ニ増税ヲ行フカ如キハ事  
情固ヨリ之ヲ許サス且此等諸税ハ設令  
ニ増税ヲ為スモノトスルモ其得ル所僅  
少ノ額ニ止リ以テ海軍擴張ノ財源ニ  
充ツルニ足ラス酒税ハ明治二十八年以前  
ニ在リテハ一石四圓ノ課税ニ過キサリニ  
モノ同二十九年ニ七圓同三十二年ニ拾貳

圓同三十四年ニ更ニ増シテ拾五圓ト為  
シ僅ニ數年ノ間ニ三度増税ヲ行ヒ殆  
ト四倍ノ増徴ヲ為シ今日ニ於テハ非常  
ノ重税タリ之カ為メ近來頗ル脱税ノ  
弊ヲ增長シ又酒造業ノ萎靡セントス  
ル傾向アリ此上増税ヲ行フカ如キトア  
ラハ遂ニ税源涵養ノ途ヲ求メ以テ當業  
者ノ負擔ヲ輕減スルノ策ヲ講シタル  
後徐ニ之カ增收ヲ計ルハ可ナリト雖モ今

日ニ於テ遂ニ増税ヲ行フカ如キハ斷ニテ  
不可ナリ葉烟草專賣ハ其方法ヲ改良  
ニ製造ノ專賣ヲ實行スルニ至レハ  
頗ル好個ノ財源タルヘキ見込ニシテ之カ  
改正法案ハ目今詮議中ニ屬スト雖モ  
之カ為メ一時巨額ノ準備費ヲ要シ  
之ヲ償却シ了リテ相當ノ收入ヲ得ルニ  
至ルハ數年ノ後ニ屬スルヲ以テ其收入ヲ  
以テ海軍擴張ノ資ニ供スルコト能ハス  
現行租税以外ニ於テハ絹布税ノ如キ數々

世論ニ上ル所ナリト雖モ絹布税ハ課税  
ノ方法頗ル困難ニシテ動モスレハ同業  
ノ發達ヲ妨クルノ虞マリ到底言フヘク  
之ヲ行フヘカサルノ税ナリ

以上諸税ハ孰レモ之ヲ以テ新財源ノ目  
的ト為スヲ得ス唯餘ス所ハ地租増徴ノ  
一事アルニシテ地租ハ制定以來土地價格  
ノ騰貴其他貨幣法ノ改正等種々ノ  
原因ニ依リ現行ノ地租ハ改租當時ニ比シ  
大ニ農民ノ負擔ヲ減少シタルコトハ疑ヲ

容レズ明治三十二年ニ於テ増率ヲ行  
ヒ約千百七拾萬圓ヲ増徴シテリト雖モ  
之ト同時ニ地價ヲ修正シ約千百七拾萬  
圓ヲ減シ尚ホ監獄費ヲ國庫支辨ニ  
移セシカ爲メ地方ノ負擔ニ約千百七拾  
萬圓ヲ減シテ以テ彼此差引シトキハ  
地租増徴ノ爲メ實際地方ノ負擔スル  
額ハ四百七拾萬圓ニ過キス數年來酒稅  
營業稅砂糖消費稅等他ノ商工業者  
ノ負擔ヲ増加シタルモノニ比スルトキハ

其額僅少ナリト謂ハサルハカラス況ヤ現在  
三十二年増率後ノ實況ニ徴スルモ敢  
テ之ク負擔ニ堪ヘサルノ跡ヲ見サルニ  
於テヤ仍テ海軍擴張臨時費及其  
經常維持費ノ財源トシテハ明治三十  
六年度限り舊率ニ復セラルヘキ地租  
率ヲ同三十七年度以後ニ繼續シテ以テ  
之ク財源ニ充テントス  
地租率繼續ニ依ル歲入増加ヲ以テ海  
軍擴張ノ財源ニ充テントスルニ同擴



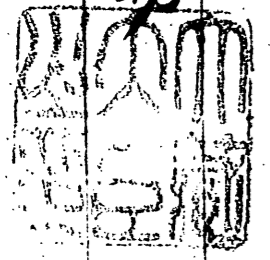
張費ノ年額ハ不同アルニヨリ或年ノ  
剩餘ヲ以テ他ノ年ノ不足ニ充ラサルハ  
カラス依ラ之ヲ一般歳入ト區分シ置ク  
ヲ要スルニヨリ一旦軍艦水雷艇補充  
基金ニ繰入シ必要ノ都度該基金  
ヨリ更ニ一般會計ニ繰入シ使用セント  
ス

明治三十六年度ニ於ケル艦艇製造費  
貳百六拾八萬七千六百八拾貳圓ハ一時  
繰替支辨シ三十七年度以降ノ地

租收入ヲ以テ償却スルノ經畫ナリ  
以上陳述シタル理由ニ依リ明治三十六  
年度海軍臨時艦艇製造費追  
加概算及之ニ關聯ノ法律案三件  
ヲ添附シ茲ニ閣議ノ決裁ヲ仰ク  
右閣議ニ提出ス

明治三十五年十一月二十七日

大藏大臣男爵曾禰荒助



内閣總理大臣伯爵桂太郎殿



明治三十六年度歳入歳出總豫算追加説明

明治三十六年度歳入歳出總豫算追加トシテ計上スル所ノ金額ハ歳入歳出各貳百六拾八万七千六百八拾貳圓十リ是海軍ノ設備ハ國防ノ大計ニ基キ曩ニ畫策シタル明治二十九年度ヨリ同三十八年度ニ涉ル繼續事業ハ漸次竣成ヲ告ケントスルニ際シ更ニ設備ヲ進張スルノ急切ナルヲ認メ軍艦ノ製造並之ニ伴フ陸上ノ施設ヲ經畫シ總費額九千九百八拾六万三百五圓ヲ明治四十六年度マテ十一箇年度間ノ繼續費ト為シ其明治三十六年度ニ要スル金額及其財源ニ充ツル軍艦水雷艇補充基金ノ繰入ヲ豫算セルニ由ル

豫算

第一條 明治三十六年度歳入歳出追加額ヲ各貳百六拾  
八万七千六百八拾貳圓四拾六錢ト定ム其款項ノ金額  
ハ別冊甲辨歳入歳出豫算ニ據ルヘシ

第二條 別冊乙辨所掲ノ費途ハ其規畫スル所ニ隨ヒ  
明治三十六年度以降ノ繼續費ト為ス













理由書

臨時艦艇製造費及之：伴フ諸經費ノ財源ニ充ツル  
為ノ明治三十七年以降地租ヲ増徴スルノ必要アリ  
是レ本法案ヲ提出スル所以ナリ



理由書

地租定率ヲ増加スルト同時ニ其ノ附加税ノ制限ヲ  
低下スルノ必要アリ是レ本法案ヲ提出スル所以ナ  
リ





計

五五八八四田・七八四

五九四二二九一八。

一四九九六三二五八田

三拾余万田









